

禪の友

Zen no Tomo

6

June 2019

特集

写経会・写仏会





ご本山だより

大本山永平寺

【眼蔵会^{げんぞうえ}】

大本山永平寺 ☎ 〇七七六・六三・三一〇二



緑深まる永平寺では、仏殿前の蓮蕾^{れんらい}が綻び始めています。草木はスンスンと背を伸ばし、連日草取り作務^{さむ}をしていますと、指先が緑色に染まってまいります。

さて、永平寺では毎年、「眼蔵会^{げんぞうえ}」という、永平寺をお開きになられたた道元^{どうげん}禅師さまがお示しになられた『正法眼蔵^{しょうぽうげんぞう}』という書物の学びを深める会が開かれます。

道元禅師さまは、よく夜分に弟子たちを集め、様々な法話をなさいました。その中で、古人の言葉を引いたこのような一節がございます。

霧^{きり}の中を行けば
覚^{おぼ}えざるに衣^{ころも}しめる

当たり前のことなのですが、善き仲間と共にいると、自ずから善き者となるということでしょう。でも、当たり前のことだからこそ、大切なことだと思ふのです。心安らくなる善き友を得るには、まず自らが善き友でなければなりません。その為に、向き合う者の幸せを願える私たちであります。

等しい志を持った仲間が永平寺に集まり、和合^{わごう}修行を大事とし、道元禅師さまの伝えられたお釈迦さまのみ教えを温める姿は、その姿その身そのままが仏さまのようであります。

『禅の友』を開き持っている読者の皆さま方をはじめ、すべての生きとし生けるものの安心を願い、今年も「眼蔵会」が営まれます。



ご本山だより 大本山總持寺

【伝光会撰心】 参禅は須らく自ら参悟すべし

大本山總持寺 ☎〇四五・五八・六〇二一



總持寺のある横浜市鶴見区は、六月になると海から南風が吹き、ちょうど梅雨の時季とも重なり高温でじめじめした気候になります。そんな中、本年も六月三日（月）から七日（金）までの五日間、伝光会撰心が行われます。

期間中は、坐禅に徹するとともに池田魯参老師（駒澤大学総長）ご提唱による『伝光録』を参究いたします。

この撰心は昭和二十一年に独住第十七世・渡辺玄宗禅師が私財を投じて始められた行持で、一般の方も参加することが出来ます。

『伝光録』は總持寺開祖・瑩山禅師がお示しになられた宗典で、お釈迦さまから徹通禅師（瑩山禅師のお師匠さま）までの五十二名のお祖師さまについて、一名ずつ章を設けてその教えや

足跡を紹介されております。また、各章ごとに瑩山禅師ご自身の見解も随所に示されております。この宗典を参究し坐禅に励むのが伝光会撰心なのです。

副題の言葉は、「禅に参じるには必ず自身で参じて悟らなければならぬ」という第三祖・商那和修尊者章の一節ですが、悟りとは「自未得度先度他」に代表されるような菩薩思想に基づいたものを指します。

この春に上山したばかりの修行僧にとっては初めて経験する行持であります。それぞれ自己の参究を徹底する五日間となります。

選・坊城俊樹

花筏よけて矢切の渡し舟

埼玉県 橋本 永子

評

「花筏」は落花が水面に連なっている様子。筏のように見えるところからきた。その小さな筏を柴又へ向かう舟がよけて渡ってゆくさまを情緒あふれる句にまとめた。舟のほうを避けるという感覚に俳味をおぼえる。

みつばちが夢中になつて花の中

福井県 廣瀬 しのぶ

評

なんとも優しい感覚の句である。技巧とかに溺れることのない素直な口語体に好感を持つ。俳句的な言い方だと「みつばちの夢中になりて花の中」となるが、それではこの蜜蜂の可愛さが出てこないと思う。

◆ 雲雀鳴く谿の底まで一直線

東京都 鈴木英治

◆ 自転車をこぐ目まぶしき涅槃西風

静岡県 石濱 徹

◆ 春水の躍りて田から田へ流る

埼玉県 小林茂之

◆ 話すこと溜めて忘れて夜半の春

兵庫県 内藤昭子

◆ 挨拶を渾名で返す彼岸道

鳥取県 眞山博充

◆ 亡き夫に重なる雛の右大臣

長野県 小平紀恵子

◆ 放牧の山羊の鼻先下萌ゆる

和歌山県 田崎よし子

◆ 大欠伸いでし泪や啄木忌

埼玉県 中島新一

◆ 荷車の依に蝗のせ帰る

三重県 西村廣視

◆ 陸続の桜に雲もなかりけり

静岡県 佐藤 至

◆ 太鼓打つ一打一打に春の音

神奈川県 佐野 勇

◆ 一村は鶯の輪の中春耕す

三重県 苅屋奈良美

選者吟

ヴァイオリンとて臙夜を独りごつ

俊樹

作句小見

なにやら難解で怪しい句である。春の夜中の臙夜が満ちているころ、ヴァイオリンさえも独り言をいうように何か怪しげな旋律を奏でそうだということである。これは幻想風景であり、言わば幻想句とでもするべきか。

選・長澤 ちづ

帰れないが帰らないに変わりゆくふるさと
の地に花は咲けども

東京都 鈴木 正作

評 東日本大震災から八年を経て被災した人々の
事情も、複雑になってきた。子ども中心の若い
世代は避難先での生活に一定の安定を得て
「帰らない」という選択をする人々もいるらしい。
作者は東京在住者だが被災地福島に心を
寄せて詠う。

わが丘ゆ見晴らす海は風ぎ渡り春光裂き
て航跡白し

鳥取県 眞山 博充

評 大きな視野に捉えて伸び伸びと詠う上の句、
一転して下の句は屹立する語でまとめ上げた
ところがよかった。春の海の景がこんな鮮やか
かという若干の疑義はあるが。

◆ 用水桶の水を割って手を洗う痺れる冷たさ菜園の朝

広島県 小畑 宣之

◆ 朝霧の濃き川沿いを通う道砂鉄川から北上川へ

岩手県 千葉 喜恵

◆ 春先の芋麻村の草屋より昔ながらの音聞こゆ

福島県 西木 甚

◆ 北帰行の白鳥しばし休めむと八郎鴻にダミー泳かしむ

秋田県 小田 篤恭

◆ 雨水すぎ登蟹も今朝めぐりきて田おこしさる土の色濃し

宮城県 須藤 智恵子

◆ 隣席の乙女ら小声でハミングす花の季節に電車に乗れば

広島県 徳永 進一郎

◆ 房総の菜の花畑の真ん中を夷隅鉄道のんびり走る

千葉県 富野 光太郎

◆ 刻々と姿を変える冬の山眺めて飽きず無彩の彩を

秋田県 小松 紀子

◆ 高波に打ち上げられし針千本虚ろな瞳に空を映して

鳥取県 山本 浩一

◆ ひとり居のわが食案ずる娘にライン筍ごはん今炊けました

静岡県 杉原 民子

選者詠

机上より三千六百の峰々を見下ろし旅の予感たかまる

ちづ

作歌小見

世界遺産の熊野詣の旅をしました。とはいえ飛行機
やバスを使つての旅（古道の一部など歩いた程度）、修験者や昔人の
西行らの難儀な旅には及びもつかぬもの。峻嶲な熊野と正反対の夷
隅鉄道の旅をする富野さんの歌、三句目が効果的。